The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学日本語日本文化教育センターでの日本語教育実習報告書
Author(s)	山崎, 今矛季
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 22-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学日本語日本文化教育センターでの日本語教育実習報告書

山崎 今矛季

０．はじめに

2023 年 10 月から 2024 年の２月までの１５週間、大阪大学日本語日本文化教育センター（CJLC）で、日本語教育実習を行った。１５週間という長い期間、私を含む実習生の指導をしてくださった松岡先生、また、ともに実習を行った実習生のおかげで、非常に有意義な経験をすることができたことに心から感謝している。

１．基本情報

実習先は、大阪大学日本語日本文化教育センター（以下 CJLC）である。大阪大学箕面キャンパスの 7 階にあり、多くの留学生が所属している。私はこの CJLC で１０月から２月の１５週間にわたり、実習を行った。CJLC の松岡先生が指導教員として、１５週間受け入れてくださった。実習生は私を含めて３人で、他大学で日本語教育について学んでいる日本母語話者の実習生と日本語非母語話者の実習生とともに実習をした。担当した授業は、金曜日３限に開講されている「日本語中級文法・語彙（秋冬）」という授業で、受講している学生は２人であった。

２．実習内容

2.1　実習開始前

１０月の初めにオンラインでの顔合わせがあり、そこで指導教員と実習生と初めて会い、実習スケジュールや担当する授業の日程決めをした。毎週実習生が交互に授業をし、１人の実習生が合計４回の授業を担当することが決まり、１０月中旬から実習が始まった。

2.2　授業の進め方・方法

基本情報で述べた通り、この実習で担当した授業は、「日本語中級文法・語彙（秋冬）」である。この授業は９０分間の授業である。前半の４５分間は実習生がことばの授業を行い、後半の４５分は指導教員の松岡先生が文法の授業をする、という流れであった。また、実習生の授業は３人の実習生が順番に担当するという方法で授業を行った。実習生のことばの授業を行うにあたって、使用した教科書は『身近なテーマから広げる！にほんご語彙力アップトレーニング』である。１つの課を２回の授業で完結させる進度で授業を行った。また、授業を行った教室には、大きなスクリーンがあり、パワーポイントを使用する授業方法であった。実習生の授業は、自分で振り返りを行うために、ビデオで撮影をした。

2.3　実習期間のスケジュール

金曜日の３限が授業をする日であったため、自分が授業をする週は、金曜日の授業に向けて１週間かけて授業準備を行った。準備期間は常に slack 上で指導教員と連絡を取り、授業で使用するパワーポイントづくり、教案の作成を行った。ほかの実習生が授業をする週に関しては、LINE でほかの実習生とやり取りをし、お互いに意見を出し合って授業担当の実習生の授業づくりに協力した。授業当日の金曜日は、授業前に指導教員の研究室に集まり、授業の最終確認を行い、授業に臨んだ。授業の後、４限の時間は振り返りと次の授業の打ち合わせをした。

2.4　授業見学

初めの２週間は指導教員である松岡先生の授業を見学した。ここでは、パワーポイントの作り方や授業の進め方などに注目して見学した。また、ほかの実習生が授業する日も、教室で実習生の授業を見学した。

2.5　教壇実習

この 15 週間で計 3 回の授業と 1 回のテストを行った。私は中高の教育実習に行った経験があったが、日本語教育での教育実習は初めてで、授業の作り方など学ぶことがたくさんあった。また、大学で実習するということで、相手が大学生という点でも、中高の教育実習とは違い、勉強になった。この実習では、1 週間かけて何度も考え直しながら 45 分の授業を作った。その間、指導教員ともたくさん話して、

アドバイスや指導をしていただいた。特にこの実習では、なぜこの活動をここでするのかなど、一つ一つの活動を行う理由を考える必要があることを学んだ。実習をする前までは、「授業とはこういうもの」という大体の授業のイメージがあったが、今回の実習では、「こんなスタイルの授業もあるのか」という発見がたくさんあった。まず、授業の目標設定について、教科書通りの目標が必ずしも良い訳ではないことが分かった。学生が、学ぶ必要がある、学ぶことで日本人といい関係が築けるなどと感じられる目標設定をすることが大切だということを学んだ。その目標設定によって、授業の活動が大きく変わり、授業をする側としても、目標設定によって意義のある授業ができている実感もあり、目標設定の大切さを理解することができた。

また、私の 1 回目の授業作りでは、かなり指導教員の手を借りて、授業作りをし、授業に臨むこととなった。自分の中の授業のイメージとは全く違った授業が完成し、学びになった反面、2 回目の授業で、学生に意義のある授業を自ら作ることができるか不安もあった。しかし、他の 2 人の実習生の授業作りに参加したり、授業見学を行うことで、間接的に授業の作り方を学ぶことができ、2 回目、3 回目の授業の時には、かなり自分自身で授業を作ることができるようになっていた。自分の授業の週でなくても、とても学びが多く、知識を得て、自分が授業を作れるようになっているという実感もあり、とても有意義な実習であった。

テストに関しても、自分の中のテストのイメージが壊される経験をすることができた。この実習では、「ミニクイズ」という名称のテストを行った。「ミニクイズ」というだけあって、学生にとって負担の少ないテストだが、授業の目標が達成できているかを確認するテストを作る必要があった。負担軽減のため、紙のテストではなく、Google フォームでテストを作成した。また、実生活において音だけを聞く機会は少なく、常に映像が伴っていることから、リスニング問題は音声だけのテストではなく、実習生が出演している動画を撮影して、テストを作った。授業作りの際には、学生が日常的に使えると感じられる授業目標を設定したが、その授業目標を達成できているかを、授業中の「活動」などではなく、「テスト」という形で確認する必要があり、テストを作ることは、授業を作ることと同じくらい難しかった。

今回の実習では、自分が持っていたイメージの授業やテストは、形は合っていても、本当に学生の為になるのか、という点で、もう一度考え直す必要があることがわかった。また、こんな授業やテストがあってもいいんだ、という自分ができる授業やテストの方法を広げることができた実習であった。

３．実習を振り返って

週 1 回の授業を 3 人の実習生で交互に行うということだったので、実習が始まる前は、そんなに大変ではないだろう、と思っていた。しかし、この 15 週間は毎日何か実習のことについて考える日々で、大変だったが、本当に有意義な時間だった。他の実習生は他大学の学生だったが、実習をする中で、お互いに授業作りについて相談をしたり、先生から指導していただいたことを共有したりして、仲を深めることができた。2 人の授業から学ぶことも多く、授業作りの相談をしたときにも、真剣に考えて答えてくれて、2 人と一緒に実習をしたことでより自分の学びにもなったと思う。

指導教員の松岡先生にも本当にお世話になり、授業作りで悩んでいる時には、的確なアドバイスをしてくださり、授業当日には自信を持って授業に臨むことができた。さらに、授業後の振り返りの際にも、授業の良かった点と改善すべき点を伝えてくださり、自分が気づけなかった自分の課題の原因を突きとめることもでき、とても学びになった。また、授業の反省をするなかで「教育」についての問題点について議論することもあり、自分の中の当たり前を疑い、自分の考えを深めるきっかけにもなった。

４．おわりに

CJLC での 15 週間実習は、私にとって本当に貴重な経験になった。それは、15 週間という長い期間、熱心な指導をしてくださった松岡先生と、一緒に実習を行った実習生、また実習生の授業に一度も休むことなく参加してくれた学生のおかげだと思う。松岡先生からは、本当にたくさんのことを学び、私の大学 4 年間の中で最も濃くたくさんのことを学べた 15 週間であった。自分の成長を感じることもでき、松岡先生には感謝してもしきれない。また、他の実習生と 3 人で実習をし、お互いがそれぞれに学んだことを共有して、週を重ねるごとに、深い話し合いをすることができたおかげで、大変な実習の中でも、

楽しく実習をすることができたと思う。さらに学生は 2 人と少なかったが、2 人とも温かい雰囲気で実習生の授業に参加してくれて、安心して楽しく授業をすることができた。この実習で関わった松岡先生、実習生の仲間、学生には、本当に感謝している。CJLC での日本語教育実習は、私の大学生活の中で、有意義な時間になった。